

元旦の新聞社説

写真は元旦 7 時 6 分、自宅ベランダからの初日の出。生駒山一带に広がる朝焼け空。いつものようにコンビニに元旦の新聞を買いに行く。自転車で 6 店も回って、やっと手に入れた。自宅配達分を含め全国紙など 7 紙を 2 日かけ（2 日は休刊）、じっくり読む。写真は、右から順に毎日、読売、日経、朝日の社説である。すこし紹介する。



毎日「民主政治の再構築 あきらめない心が必要だ」—温暖化や海洋汚染などの地球の生態系に関する問題や、核軍拡競争の懸念が深刻の度合いを増している。国家単位で答えを出すことが困難な問題がうねりを増す中で、ポピュリスト政治家は国際秩序に大きな価値を認めない。地球の持続可能性レベルの危機さえ招来している。日本が果たすべき役割を、改めて考えるときだろう。



朝日「2020 年代の世界 「人類普遍」を手放さずに」—人権、人間の尊厳、法の支配、民主主義—。めざすべき世界像として SDGs も掲げるこれらの言葉は、西洋文化が打ち立てた普遍的な理念として、今日に生きる。日本はどうか。国会での論戦を徹底して避け、権力分立の原理をないがしろにする。メディア批判を重ね、報道の自由や表現の自由を威圧する。批判者や少数者に対する差別的、攻撃的な扱いをためらわない。戦前回帰的な歴史観や、排外主義的な外交論も、政権の内外で広く語られる。

読売「平和と繁栄をどう引き継ぐか 「変革」に挑む気概を失うまい」と題した長文の社説—世界に大きな戦争の兆しはない。安倍首相の長期政権下で政治は安定している。諸外国が苦しむ政治、社会の深刻な分断やポピュリズムの蔓延もみられない。新たな時代へと始動するにあたり、起点とすべきは、多くの国々がうらやむ日本の総合的、相対的な「豊かさ」を正當に評価し、これまでの発展と政治や社会の対応に自信を持つことである。先行きの問題を正確に把握することは最も重要だ。現状に困窮している人もいる。だが、「危機」ばかりが叫ばれ、不安や悲観が蔓延すれば、社会は活力を失う。

@読売の安倍政権や現状認識などを示している。読売的なメッセージだ。

日経「次世代に持続可能な国を引き継ごう」—安倍晋三首相は 21 年秋に自民党総裁の任期切れを迎える。その前年は後継を巡り「政治の季節」になりやすい。それをむしろ奇貨として、持続可能な国づくりの具体策を競う年にしてほしい。

産経は社説ではなく、論説委員長の「年のはじめに 政権長きゆえに尊からず」で、「岩盤支持層」から失望感が広がっているとして、安倍首相の靖国参拝を求めている。

(2020 年 1 月 2 日)